

三
部
書
合唱教課書

伴 奏 附



舊友の再會

オンカラス

(無伴奏)

一、ヒ　　ガ　シニニ　シ　ニ　オ　ノ　ガ　ジ　シ
二、い　つ　と　せ　む　と　せ　み　ぎ　る　う　ち　に

マ　ナ　ビ　ノ　ミ　チ　テ　タ　タ　ド　ル　ト　テ
セ　タ　け　も　の　び　ぬ　お　と　な　び　ぬ

ワ　カ　レ　シ　ト　モ　ト　ユ　カ　リ　ナ　ク
あ　ご　な　き　う　た　に　し　か　は　あ　れ

ム　カ　シ　チ　カ　タ　ル　タ　ノ　シ　サ　ヨ
む　か　し　に　か　へ　る　こ　こ　る　か　な

秋の歡び

Allegro comodo

女男 I
聲聲
四
重
唱 II

一 ムカヒノモリカゲ ナビクシラ
二 ひさがきつくり て すまふわか

Allegro comodo

ハ　タ　　ドヨメクヒトゴ　エ
も　の　つ　あ　つ　く　お　き　な　も
ムカヒノモリカゲ ナビクアカ　ハ　タ　カグラモキコエ
はれぎぬかざり　て　つ　ぎ　ふ　た　さ　め　ご　　か　げ　よ　る　わ　ら　べ
ハ　タ　　ドヨメクヒトゴ　エ
も　の　つ　あ　つ　く　お　き　な　も

ムカヒノモリカゲ ナビクアカ　ハ　タ　カグラモキコエ
はれぎぬかざり　て　つ　ぎ　ふ　た　さ　め　ご　　か　げ　よ　る　わ　ら　べ

コロウキ タツ タノシヤ コシノアキ
 こもによる こぶ
 テも ケフ ノマツ リビ タノシヤ コシノアキ
 けふ のまつ りひ
 コロウキ タツ タノシヤ コシノアキ
 こもによる こぶ
 テも ケフ ノマツ リビ タノシヤ コシノアキ
 けふ のまつ りひ

ノ ウレ シーヤ マレノミノリ トレ トレ イハヒノサ
 ノ ウレ シーヤ マレノミノリ トレ トレ イハヒノサ
 ノ ウレ シーヤ マレノミノリ トレ トレ コノサ
 ノ ウレ シーヤ コノミノリ トレ トレ コノサ

カズキクメ クメ マツリノニ イザケマヘ ヤ ウタヘ
 カズキクメ クメ マツリノニ ヒザケマヘ ヤ ウタヘ
 カズキ クメ クメ ソノニ ヒザケマヘ ヤ ウタヘ
 カズキクメ クメ ソノニ ヒザケマヘ ヤ ウタヘ

1 2
 + +
 + +
 + +
 + +

ククレクー ククレクー いざ起きなむ
眠れる童の 夢やぶらす
ククレクー ククレクー さやけき朝
一日のもとひは 朝にあり
ククレクー ククレクー とく起き出で
わが身の幸ひ 神にいのれ
ククレクー ククレクー

○ 舊友再會

八波則吉作歌

一、東に西におのがじし
學びの道を通るとて
別れし友とゆくりなく
昔を語るたのしさよ。
二、五とせ六とせ見ざる間に
脊丈ものびぬ大人びぬ
あどなき歌にしかはあれ
昔にかへる心かな。

○ 秋の歡び

(男聲四重唱)

(甲) むかひの森蔭 靡く白旗
(乙) むかひの森蔭 靡く赤旗
(甲) どよめく人聲 (乙) かぐらも きこえて
(甲) こゝろ浮立つ (乙) 今日の祭日
(合) たのしや ことしの秋の うれしや
稀の實
とれとれ 祝ひの盃くめく 祭の新酒
舞へや 歌へや。
(甲) 人垣つくりて 角方ふ 若者
(乙) 晴衣かざりて 集ふ乙女子
(甲) 杖つく翁も (乙) かけよる 童も
(甲) ともに よろこぶ (乙) けふの 祭日
(合) たのしや ことしの秋の うれしや
稀の實
とれく 祝ひの盃くめく 祭の新酒
舞へや 歌へや。

○ 月下の人魚

八波則吉作歌

月澄む海原 夜ただ我が泣く
なまじ此の面 人に似ざらば
ここの魚類 すべて我が友
友どち群れあて 我が世を経なまし
慕はし船人 あはれ船人
懐かし船歌 あはれ船歌。
○ 雪
一、降れく雪 つめく雪
野も山も ましろにつもれ
降れく雪 つめく雪
野も山も ましろにつもれ
降れ 降れく雪
つもれや雪 野邊に山に
二、ヒラヒラヒラ チラチラチラ
降りくるは 櫻か雪か
ヒラヒラヒラ チラチラチラ
降りくるは 櫻か雪か

みよ ヒラヒラヒラ チラチラチラ
花か? 雪か?

○ 堇

(高音部)

咲きほこれる 野べのすみれ
ゆかし ゆかし すみれ すみれ
春風にかほる やさし色香
萌ゆるすがた やさし
花すみれ 摘めば色もゆかし
むらさき天の匂ひ花すみれ
あはれすみれ いとしすがた
花の小人 やさし
朧 夜に 小さな神の
植えし花よ 野べのすみれ
永久に咲けよ ゆかしすみれ
いとすがた やさし色香
永久に匂へ すみれ

(中音部)

咲きほこれる
野べのすみれゆかしく
すみれ すみれ
春風にかほる やさし色香
萌ゆるすがた やさし
あはれすみれ あはれいとしすがた
花の小人 やさし いとも やさし
朧 夜に 小さな神の
植えし花よ 野べのすみれ
永久に咲けよ ゆかし 花すみれ
いとすがた やさし色香
永久に匂へ すみれ
(低音部)
咲きほこれる
野べのすみれ ゆかしゆかし
すみれ すみれ
あはれすみれ いとしすがた
み花の小人 やさし いとも やさし

小さな神の

植えし花よ 野べのすみれ
永久に咲けく ゆかしすみれ
いとすがた やさし色香
永久に匂へ すみれ。

○ 山も里も

八波則吉作歌

一、山も里も 霞む春の曙
梅に 桃に 來鳴く 谷の鶯
二、ちらり ちらり 咲くよ 庭の櫻も
遠方に 近方に 鳴くよ 野邊の
雲雀も。

○ 蓮

一、濁りにそまぬ 蓮葉 卷葉
宿れる露は 玉か 玉 ああ
恵み深き南無佛の あはれ涙か
二、白蓮咲きぬ 紅蓮咲きぬ
眠れる稚兒のさめしごと ああ

第二季乙組

古川保子

大正十四年三月二十五日 印刷
大正十四年四月五日 發行

非賣品



複製許不

轉寫騰禁

編纂者 若狹萬次郎

印刷者 樂友社

發行者 音樂研究會

大阪市西區市岡辨天町一ノ八二

東京市牛込區筑土八幡町三四

○村の祭

一、黄金の穂波森によせて

浮き立つ村の祭日

里にひびく笛や太鼓

ぞめきぞめく賑ひ

二、とどろく太鼓浦曲わたり

ふきなす笛のゆかしや

けふの祭うたへ祝へ

こがねみのるよき日を

三、野山にとよむ宮の相撲

花火の音もいさまし

けふの祭うたへ祝へ

こがねみのるよき日を

○五 月 秋田實作歌

一、美はしきかな春はふけて

野にも山にもこゆき緑の

日増し色ます五月の日は

若き我等の胸もをどる

若き我等の胸もをどる

二、かのほこすぎのみ空さして

若きいのちの伸びゆくまゝに

のぞみ燃ゆる五月の日は

若き我等の胸もをどる

○埠頭の別れ

犬童球溪作歌

(甲) 行く手遠き旅に

(乙) 浪路遠き國に

(甲) 君は今し立つよ

(乙) 我は今し行くよ

(甲) 分つ袂に

(乙) 露おきまさる

(乙甲) 何れの時ら又も君と

再び茲に其手握らん

嗚呼名残はつきせぬ

けふの別れ

(以上反覆)

(甲) 風は木々になげき

(乙) 水は岸にむせぶ

(甲) 波は空を浸し

(乙) 雲は行手とぞす

(甲) 御爲に行きます

(乙) さは云へ御國の

(乙甲) 嗚呼嗚呼勇みて別れん

さらばさらば

○春の光

(一) うららの春の空

のどけき空の色

山にも野邊にも喜び満ちたり

咲く花霞に匂ひて

雲とまがひ

吹雪する花はひら

日傘にひらひら

神のめぐみ四方にあふれ

人の心常にしたのし春のながめ

胸を張りて乙女もいざ歌へララ……

生命若き春の姿ララ……

たのしや うれしや

(二) うららの春の海

なごめる海の色

岸にも島にもどけき清らたり

潮の香新たに白帆も

軽くすべり

櫻鯛をどるたき